

## 中山道と大湫宿の概要

### ■中山道の概要

- ・中山道は江戸時代の五街道のひとつで、慶長7年（1601）に整備（伝馬制が設定）され、慶長9年（1604）には一里塚が築かれるようになったとされる。
- ・現在知られる中山道は江戸日本橋を起点とし、草津で東海道と合流して京都三条大橋に至る、全長約136里（約534km）、69宿の街道。

### ■美濃国内の中山道の概要

- ・美濃国内の中山道の道程は約32里（128km）、17宿の街道で、西濃・中濃においては主として濃尾平野の北部を横断し、東濃地方においては主として山間部を通過。
- ・美濃国内には31箇所に一里塚が設置されたが、現在のその多くは失われている。その中で恵那市から瑞浪市にかけての範囲には、一対の一里塚（両塚）が6箇所（瑞浪市内4箇所、恵那市内2箇所）連続で残されており、全国的にも極めて貴重な事例。

### ■瑞浪市内の中山道

- ・瑞浪市内の中山道は市内北部の丘陵地帯（日吉町、大湫町、釜戸町）を横断し、全長は約14.3kmに及ぶ。そのうち約5.2kmが地道のまま残っており、連続する4箇所の一里塚（両塚とも）が残されている。
- ・瑞浪市内には大湫宿（大湫町）、と細久手宿（日吉町）という二つの宿場が設置され、その間に所在する琵琶峠は、美濃国内最高所の峠として知られている。また琵琶峠は木曾路名所図会に記されたり歌に詠まれるなど、名所（景勝地）としても知られていた。
- ・大湫宿から大井宿（恵那市）までの間の行程は起伏が激しいことから、通称「十三峠」と呼ばれており、実際には十三以上の峠があったことから「十三峠に（お）まけ七つ」と言われていたという。

### ■大湫宿の概要

- ・大湫宿一帯は、戦国時代の天正年間（1573～1590）から保々氏（一説には鶴ヶ城主の一族）により開拓が始まったとされる。
- ・大湫宿の（正式な）設置は、中山道の整備から少し遅れて慶長9年（1604）。御嵩宿と大井宿の道程が長く、また険難であったため。それでも距離が長かったため慶長15年（1610）には細久手宿を設置。
- ・宿場の標高は約500mで、美濃国内で最高所の宿場（江戸からは47番目、京都からは23番目）。本陣、脇本陣は代々保々氏が務め、尾張藩付属の木曾衆「山村氏」と「千村氏」の支配を受けた。
- ・大湫の名称の由来は、「大きなクテ（湿地）」であり、現在まちなみの南側にある水田がかつてのクテであったと思われる。
- ・まちなみの規模や道幅は江戸時代から大きく変わっておらず（天保14年（1843）時点で家数66軒、旅籠屋30軒、総人数338人）、現在のまちなみは文政9年（1826）の大火以降に形成されたもの。